

## 「人に尊ばれるものは、神には忌み嫌われる」

2015年10月15日

ルカによる福音書 16章 14節～18節。金に執着するファリサイ派の人々が、この一部始終を聞いて、イエスをあざ笑った。そこで、イエスは言われた。「あなたたちは人に自分の正しさを見せびらかすが、神はあなたたちの心をご存じである。人に尊ばれるものは、神には忌み嫌われるものだ。律法と預言者は、ヨハネの時までである。それ以来、神の国の福音が告げ知らされ、だれもが力づくでそこに入ろうとしている。しかし、律法の文字の一画がなくなるよりは、天地の消えうせる方が易しい。妻を離縁して他の女を妻にする者はだれでも、姦通の罪を犯すことになる。離縁された女を妻にする者も姦通の罪を犯すことになる。」

主イエスは「あなたがたは、神と富とに仕えることはできない」と語られた。お金に執着するファリサイ派の人々は、これを聞いて嘲笑した。彼らは、口では「神、律法」と言っているが、内心では「しょせん、世の中はお金だよ」と思っていたのである。そこで、主イエスは「あなたたちは人に自分の正しさを見せびらかすが、神はあなたたちの心をご存じである。人に尊ばれるものは、神には忌み嫌われるものだ」と言われた。最近、偽善という言葉が聞かなくなった。偽りでもいいから、善を行ったらいいのではないかと思うことがあるが、ファリサイ派の人々は律法を厳守している信仰深い自分を見せて、人からの尊敬と敬意を求めるものであった。この偽善には何の慈善性もない。主イエスは、それを見抜いて、神は心の中まで見通しておられると言われた。そして「人に尊ばれるものは、神には忌み嫌われるものだ」という言葉は強烈である。

東京五輪・パラリンピックのエンブレム問題で、佐野研二郎氏のエンブレムは模倣、盗作の疑義が出された。佐野氏は断じて模倣や盗作ではないと主張していたが、社会的バッシングや家族のプライバシー侵害に耐えられず、エンブレムを引き下げた。組織委員会はこれを受け入れ、白紙から再出発することになった。この件に関し、作家の佐藤優氏がキリスト教月刊誌『福音と世界』で下記のように書いている。「ここには、真実に照らしてどのように行動すべきかという規範が、完全に欠如している。『然りは然り、否は否』という姿勢を貫くことが佐野氏にも組織委にもできないのは、自らの行動規範になる超越的な基準が存在しないからだ。」「超越的な基準」を自らの中に持つ人は「然りと否」を明言できる。この基準を明示することが教会の社会的責任ではないか。

主イエスは律法と預言者は洗礼者ヨハネの時代で終わったと宣言される。主イエスの到来によって、神の国の福音は知らされた。「だれもが力づくでそこへ入ろうとしている」を、岩波訳は「皆その中に暴力的（なほどになだれ）込んでいる」と訳している。明らかに岩波訳の方が正しい。そして、皆がなだれ込んだ神の国では律法の文字の一画もなくなることなく、神を愛し隣人と共にある関係が生き生きと息づいている。「旧約」の時代は終わり、主イエスの赦しによる、神と共に生きる喜びの「新約」の時が来ている。

「妻を離縁して他の女を妻にする者はだれでも、姦通の罪を犯すことになる。離縁された女を妻にする者も姦通の罪を犯すことになる」は文脈の前後の関係はない。夫が勝手気ままに妻を離婚していた時代、離婚を戒めた言葉であろうが、今日では通用しない。離婚せざるを得ない状況もある。離婚後、再婚して、幸せに暮らしている人は大勢いる。その人々は姦通の罪を犯した訳ではない。